

令和八年度
浜松学院大学
地域共創学部

一般入試A日程 問題

＜既合格者の給費生チャレンジを兼ねる＞

「国語」

注 意 事 項

1. 問題用紙は試験開始の合図があるまで、中を見てはいけません。
2. 問題用紙および解答用紙に、受験番号および氏名を必ず記入してください。
3. 解答は、すべて解答用紙に記入してください。
4. 試験時間は60分です。
5. 印刷に不鮮明な所がある場合は、挙手して知らせてください。
6. 試験終了後、問題用紙および解答用紙を回収します。
回収が終わるまで、席を立たないでください。

受験番号		氏 名	
------	--	-----	--

一次の文章は、北杜夫の小説『どくとるマンボウ航海記』の一部である。これは、船医となった作者が、およそ五か月間の航海を基に書いたもので、本文は日本から出港した直後の場面である。これを読んで後の問に答えなさい。なお、出題に際し表記を一部改めている。

今度こそ日本は本当に遠ざかって行つた。

A

、やはり感慨など起す閑はない。^{ひま}私は

自分の荷物をようやく片づけ終り、隣りの医務室の点検をはじめた。タイルの床には船が持つてゆくミヤゲ物の箱や薬品の箱が積みあげられ、大げさに言えば足の踏場もない。まだ何がどこにあるかも皆目わからない。医務室には一坪足らずの小部屋がついており、薬戸棚とベッドが一つあるが、そこもいろんな箱で一杯で、その間にこの船がハワイに行つたときのヤシの実がひとつ、もう茶色に乾からびてころがしてある。

大きな汽船はいざ知らず、航海中の船は相当に騒々しいものだ。殊に医務室は場所がわるく、エンジンとスクリューの響きがじかに伝わってきて、手術台はぶるぶる震え、ドアはひっきりなしにカタカタ鳴っている。小部屋のベッドは病人用のものだが、震動と^{そうおん}噪音のため、こんな所に寝たら陸の病人ならたちまち悪化してしまいそうだ。私は戸棚の引出しを点検し、箱につまつた予想外に多い薬品を調べ、注射器やガーゼを消毒し終つてはじめて落着きを取りもどした。私のことをすべてデタラメな男と思う者があつたら

B

であ

ろう。そうしているうちにも早くも幾人かが薬を貰いにきたが、船医なんてもうメチャクチャに閑であると聞かされていた私にはちよつと意外であつた。聞けば長い航海に出る前にはこれが最後と夜ふかししたり酒を飲んだりする者がいるので、腹くだしとか風邪ひきとか、出港の日には必ず病人が多いとのこと。

すでに夜になっていて、デッキに出てみると周囲は真暗である。船全体が意外に暗い、明るくしておくとも視界が利かないため灯火はみな遮蔽^{しゃへい}してしまうからである。黒い海上を暗い船がゆつたりと上下しながら、^Cなかなか堂々と進んでいる。船首にかきわけられた波が白く泡立ち、湿っぽい風が耳元をすぎる。やがて、右手の水平線上にほそい三日月がかかり、^Dひとすじの銀光を黒い海面に流した。そうして潮風の匂いをかぎ、船体がゆつたりと傾き、のしあがり、沈むのを感じていると、^Eはじめて或る種の感動が私の胸に湧きあがってきた。

翌日、次第にうねりが大きくなってきた。日本の方角は雲がたむろし、島があるようでないように判然としない。前甲板は完全に波に洗われている。船首に波がぶつかつてくだけると、それが無数のしぶきとなって船上を横ぎる。波は遠くの方は泥か粘土の造り物のように見え、近づくにつれて生きてのたくつて躍っている。日が雲に隠れ、また現われ、それに

つれて海面は刻々に変化する。その変化は千様であり、山のそれよりもっと素早く、また荒々しくとりとめなく、**F**一定の規範を有しない。私はしぶきのこない船尾の甲板に出て、**a**シオサイと風の唸りうなを聞き、溶岩のうねりのように沸き立つ波頭を長いこと見つめた。それは原始の溶鉱炉で、最初の生命がこの地球上に生じてきた場所にいかにもふさわしく、重々しく鉛色に湧きかえっている。金具や索具に塩の結晶がこびりついており、指が塩っぽく、特有のねっとりした感じになる。船室に戻ると、潮の香が身体全体に沁みついているのがはつきりとわかる。

私は今や**b**コウバクとした海の気をあびて大いに嬉しくなり、たちまちにして一つの詩のごときものをひねくりだした。

これは海だ

海というものだ

ああ その水は

塩分に満ちている

さすがに私はこの出来栄えには**c**カンブクしなかつたので、今度はもっと本物の詩を、せいそつ凄愴なまでに美しい(注1)ブレース・サンドラスの詩の一節を口の中でうかや呟いてみた。

血だらけのけものの体を

夕方

海辺づたいにひいてゆくのは このおれだ

おれが行くとき

波間から無数のタコが立ちあがる

夕日だ……

(なだ・いなだ訳)

サンドラスは我国ではあまり知られていないが、これこそ(注2)アタコロイノナの**G**申し子こみたいな男で、放浪にあけくれした彼の生涯自体が、すでに(注3)ホメロスの巨大な作品なのである。彼が旅した無数の土地、彼が経験したすべての商売を書きならべただけで、それこそ何ページも費やさねばならないので、ここではそんな真似はできないが、一八八七年パリに生れた彼が最初にエジプトにいた父のところの旅したのは生後五日目のことだった。ニキビのできる年頃になると変なマダムに花束を捧げたりなんぞばかりしているの
で、父にアパートの七階の部屋に**d**ユウヘイユウヘイされてしまったが、軽業師そのけにバルコニー伝いに脱出してしまい、汽車に乗りこむと車中で会った変てこな行商人の相棒になり、ロ

シア、アルメニア、中国などを行商して歩いた。それ以来彼はもう家族の顔を見ないし定まった居住地をもったことがない。たとえばフランスで養蜂をやっているときにも二十八回転居をした。ロンドンのミュージックホールで手品をやっていたとき、同じ舞台でアルバイトにピエロ役をやっている医学生がおり、楽屋でショウペンハウエルなどを読みふけていたが、その名はチャーリー・チャップリンと言った。カナダではトラクターの運転手をやり、米国に渡るポーランド移民船で何回も大西洋を往復し、ニューヨークでは働かず図書館に通った。彼は以前作った自分の詩がアポリネールによって剽窃ひようせつされたりしてもてんで意に介しはしなかった。第一次大戦が始まると従軍し、兵士たちがどんな具合にオシッコをするとか、イビキと砲弾の関係とか、そんなことばかり観察していた。そのとき右手を失ってしまったが、ますます転々と職業を変え、放浪の群に投じたりアマゾンをかのぼったり、もうあとは書くのも大儀である。

彼はこうした放浪の合間に、ホツサ的な勢いで作品を書いているのだが、六十歳を迎える
と、おれは自分が作家としての才能があることにいま気づいたと宣言し、なだ君によれば、最近も彼はとんでもないエネルギーで続々と新作を発表している由だ。いかにも彼らしいのは、どの本を見てもその著作目録の末尾には次の一行がつけ加えられていることである。

「あと三十三冊準備中」

船に乗ることになったとき、やはり気になったのは船酔いのことである。果して自分が船に強いのか弱いのか全然わからない。六〇〇トンの船では相当揺れるものと覚悟せねばなるまいが、ドクターが真先にぶつ倒れてくたばってしまったてはあまり見つともよい図ではない。そこで昔海軍の軍医であった知人に電話をしてみた。

「いやあ、それはやっぱりやられますよ。私なんか最初のうちはベッドの傍にドラムかん罐を持てこさせて吐き通しでしたよ」

これはイカンと私は思い、もう一人、これは空母に乗って真珠湾などに行った親戚の者に訊きいてみた。

「大きな空母で平気になってもね、また小さな駆逐艦なんかに移るとやられるね」

その小さな駆逐艦とはどのくらいかと訊くと二千トンとのこと、こいつはますますイカンと私は考えた。

一万トン近くの貨客船で大圏コースを通り太平洋を往復したMは、強情にも俺は酔ったとは絶対に言わなかったが、

「船なんて、あんた、ヤブレカブレのものだぞ。アリューション近くになるとがぶりやがつてな、サロンの椅子は倒れる、皿はとぶ、ところがそうなくてもエンジンの奴ゴトゴトゴト一向にとまらないんだね。たまには休んでもいいと思うんだが、どんな波がきたっておかまいなしだ。ひどいもんだよ。俺はもうアキレはてたよ」

ここに至って私はついに覚悟を決めた。

出港して二日目、もう新米のボーイが廊下にうずくまってゲロゲロやっており、私はまだ何ともないのでチョッピリ自信がついた。船にはそのほか三名の初航海者がいたが、やがて食席につくたびにその人たちの姿が見えなくなったので、もう少し自信がついてきた。荒天のときは食器が落ちぬようテーブルに木の枠がとりつけられる。私はさすがに食欲こそなかったが、ヨガの秘法であるコブラのポーズ、獅子のポーズをし、アラールの神、マヤの精霊、インカ帝国の太陽神インチ、(注4) マサカアカツカチハヤビアメノオシホミミノミコト、ギリシヤの恐るべき巨人エンケラドス、さては古代ペリシテ人のダゴンなどに祈り、一度だつて欠食しなかった。^H それでもそのうち自分もやられるだろうと決めており、今か今かとそれを待っているような状態であつた。

沖繩に差ししかろうとした午前中、素晴らしい日和になつた。海はどこまでも平たく群青にひろがり、油絵具を溶かしこんだような鮮やかさである。館山を出て以来、前甲板はずつと波に洗われていたので、こんな静かな海になると、なんだか嘘みたいな悪いみたいな気分である。(注5) アッパー・ブリッジに仰向けに寝そべると、澄みわたつた空があり、白雲がたむろし、マストはごくゆつたりとかしぐきりで、船はまったく静止していると思えない。ただ静かにゆるやかに揺籠ゆりかごのごとく私をゆすぶってくれる。

(注1) ブレーズ・サンドラス・・・スイス出身でフランスに帰化した詩人、小説家、旅行家。

(注2) アタオコロイノナ・・・マダガスカル島の南西部に伝えられる、とされる神話の神。

(注3) ホメロスの・・・形成的・持続的な比喩で、詳細かつ長々と繰り広げられる直喩。

(注4) マサカアカツカチハヤビアメノオシホミミノミコト・・・日本神話に出てくる稲穂の神、農業神。

(注5) アッパー・ブリッジ・・・操船を指示する操舵室の上部。

問一

二重傍線部 a～e に相当する漢字を含むものを次の各群の ①～⑤のうちから、それぞれ一つずつ選び、記号を答えなさい。

a シオサイ

- ① 米の価格が高騰し令和の米ソウドウになった。
- ② 五年ぶりのエンソウ会には大勢の観客が集まった。
- ③ 彼の作品はいつもドクソウ的で評判だ。
- ④ 新規事業のソウダイな計画が発表された。
- ⑤ 今の社会はカイソウ構造になっていることが分かった。

b コウバク

- ① 日本の人口が急速にコウレイ化に転じてきた。
- ② 現時点で本件はコウギの部分で特に問題がない。
- ③ 今年度の生徒会誌のコウセイが始まった。
- ④ 最近この工場ではコウリツのよい作業が求められている。
- ⑤ 難問解決のコウリヤク本が飛ぶように売れている。

c カンブク

- ① 突然の嵐により大型漁船がテンブクした。
- ② 体力測定で得意な種目はハンブク横跳びである。
- ③ 午後のコーヒーの時間はシブクのひとときである。
- ④ この新薬はフクサヨウが心配だと取り沙汰されている。
- ⑤ 受診後薬局からトンブク薬が処方された。

d コウヘイ

- ① 天気の良い日にはスイヘイ線が美しく見える。
- ② 今年度の提案は新旧の規定がヘイヨウされている。
- ③ 今回のプロジェクトはヘイソク感を打開することである。
- ④ 相次ぐ災害により住民がヒヘイしている。
- ⑤ これまでの訪問はヘイカ自らが御希望されたことだ。

e ホッサ

- ① 世界旅行ではジサが体調のバランスを崩す原因となる。
- ② サークルのサワ会で何人もの友人を得ることができた。
- ③ チョウサから三年を経てやっと結果が分かった。
- ④ 春から課長ホサとしての役職となった。
- ⑤ 彼のコメントはいつもシサに富んでいる。

問二

空欄Aに補う接続詞として適当なものを次の語群から選び、解答用紙に書きなさい。

【語群】 だから そして そのうえ しかし また

問三

空欄Bに補う表現として適当なものを次の①～⑤のうちから一つ選び、記号を答えなさい。

- ① 閑古鳥が鳴く
- ② 鳶とんびが鷹を生む
- ③ 借りてきた猫
- ④ 水魚の交わり
- ⑤ 豚に食われる

問四

傍線部C「なかなか」とあるが、これと同じ意味で用いたものの例を、次の①～⑤のうちから一つ選び、記号を答えなさい。

- ① この椅子は色もいいがデザインもなかなかだ。
- ② 新規の計画については具体化まではまだなかなかだ。
- ③ いくら話してもなかなか分かってくれない。
- ④ 今回与えられたのはなかなか難しい問題だ。
- ⑤ 出発時刻が過ぎているのに電車がなかなか来ない。

問五

傍線部D「ひとすじの銀光を黒い海面に流した」とあるが、これと同じ修辞法が扱われているものとして最も適当なものを次の①～⑤のうちから一つ選び、記号を答えなさい。

- ① ああ その水は 塩分に満ちている。
- ② 溶岩のうねりのように沸き立つ波頭。
- ③ 波は、近づくにつれて生きてのたくって躍っている。
- ④ 海はどこまでも平たく群青にひろがり油絵具を溶かしこんだような鮮やかさ。
- ⑤ 波間から無数のタコが立ちあがる 夕日だ……。

問六

傍線部 E 「はじめて或る種の感動が私の胸に湧きあがってきた」とあるが、感動が胸に湧きあがってくる**以前の心境**について書いている部分を本文中から探し、十五文字以内で抜き出して書きなさい。ただし、字数には句読点などの記号を含むものとする。

問七

傍線部 F 「一定の規範を有しない」とあるが、これを説明する表現として示されているものを二つ五文字以内で抜き出して書きなさい。ただし、字数には句読点などの記号を含むものとする。

①

②

問八

傍線部 G 「申し子」とあるが、この**対義語**を、次の①～⑤のうちから一つ選び、記号を答えなさい。

① 風雲児

② 寵児

③ 化身

④ 凡人

⑤ 落とし子

問九

傍線部 H 「それでもそのうち自分もやられるだろうと決めており、今か今かとそれ wait っているような状態」とあるが、なぜか。その理由について書いている部分を本文中から探して書き、これについてあなたの考えを百五十文字以上、二百字以内で書きなさい。ただし、字数には句読点などの記号を含むものとする。

二 次の文章は、齋藤孝の著書『読書力』の一部である。これを読んで後の問に答えなさい。なお、出題に際し表記を一部改めている。

読書は何のためにしなければいけないものなのか、^A 読書をするとうどんな力がつくのか。読書は自分をつくるのに力がある。それとともに強調しておきたいのは、読書をするときコミュニケーション力が格段にアップするということだ。

普通の会話をしていても、読書力のある人とな人とは、会話の質が変わってくる。学生を相手に会話をしていると、本を読んでいる学生かそうでないかはすぐにわかる。読書をしているかどうかという質問をしなくても、コミュニケーションの質からわかるのだ。

では、読書をしているかしていないかの影響は、コミュニケーションにどのような影響を与えるのであろうか。

はっきりと言えるのは、会話に^Bがあるかどうかという違いだ。中学生や高校生の友達同士との会話を聞いていると、まったく^Bのない話を次々に行っていることがよくある。それはそれで友達同士なので楽しい会話になっているのかもしれない。問題は、親しい友人以外と話す場合だ。^Bのない話し方は通用しない。相手の言ったこととまったく無関係に^C「ていうか」という始まりで、まったく別の自分だけに関心のある話をしたならば、相手はうんざりしてきて人格さえも疑うようになる。

^Bのない話し方は、社会性がないと受け取られる。

では、^Bのある話し方は、どのようにしてできるのか。

それは、相手の話の要点をつかみ、その要点を引き受けて自分の角度で切り返すことによるのである。通常、人の話には幹と^aシヨウがある。しっかりと相手の言っていることの幹を押さえて、それをより伸ばすように話するのが会話の王道だ。この幹をつかまえる力は、読書を通じて要約力を鍛えることによって格段に向上する。

会話は空中を流れていくイメージなので、つかまえてどころがない。それに対して、本は文字が固定されているので、振り返って要点を探しやすい。読書で要旨をつかまえることのできない人は、質の高い会話のやりとりは難しい。会話で要点を外さずに捉え、うまく切り返す能力は、^Dいわばどのコースに来るかわからない球を打つようなものだ。本の場合は文字として固定されているので、どのコースに球が来ているのかくらいはわかる。そこで^E要約力を鍛えることによって、ライブでの会話の要約力が向上する。

会話は、自分の話したことがきちんと相手に受け止められると思うことによって、お互いに盛り上がる。きちんと受け止めたかどうかを示すのが、相手の言っていることを自分の言葉で言い換えるというレスポンス(応答)だ。「なるほど」、「そうですね」、「たしかに」といった相槌^{あいづち}だけでも、会話は^bジュンカツを注がれたように滑らかになる。

この相槌を高度にしたものが「自分の言葉で言い換える」ということだ。相手の言葉を

鸚鵡返しにするだけでも、会話のリズムはよくなる。それをヴァージョンアップさせて、言葉を換えて同じ内容を言い換えることができれば、相手の言っている内容をしっかりと理解しつかまえていることが、相手側にもはっきりと伝わる。「同じ内容を自分の言葉で言い換えてみよう」という課題は、幼い頃から繰り返し練習する価値のあるものだ。この「言い換え力」は、コミュニケーションの中でもっとも基礎的なもののひとつだ。

自分の言葉で言い換えるためには、語彙が豊富である必要がある。それは読書によって効率よく鍛えられるものだ。言い換えにはコツがある。抽象的なものは、具体的なものに少し直し、具体的な発言に対しては、少し抽象度の高い言い方で言い換える。

新書系の本の場合には、^c ロンシが具体例とセットになって書かれていることが多い。一般的な言い方の文章の後に、「たとえば」というように例が挙げられる。これを二人の会話で行うということだ。一般的な発言に対しては具体例を、具体例を相手が挙げれば、それを一般化する。こうしたやりとりによって、幹を失わない、しかも^d キフクのある会話ができる。

会話をしていて相手が喜ぶのは、自分のいった話が無駄に終わらずきちんと相手に届いて、しかも生かされていると感じる場合だ。それが具体的にはつきりするのは、相手の話の中に自分の言ったキーワードが入り込んでいるかどうかである。自分の発言の中でも、重要だと自分が感じていた言葉(キーワード)を相手が使ってくれば、それだけでも会話に勢いが出てくる。

しかしこの程度のことならば、読書をしなくても何とかできるかもしれない。読書経験が生きてくるのは、五分前、十分前、二十分前に話された相手の言葉を引用して会話に組み込める技だ。現在の文脈そのものには出てこない、^D いわば、すでに地下に潜ってしまった

F を、もう一度掘り起こすのである。

【ア】

その言葉話を話した当人でさえも、今の時点では意識していない言葉を、もう一度舞台上に上げる。すると、相手は自分の過去に話した話と現在の話とが結びつくのを感じ、自分の中に^B ができたことを喜ぶ。もっとも気が利いているのは、話している相手がつながっていないものをつなげてあげることだ。こうしたことができるためには、相手の言葉をしつかりと押さえておく必要がある。この力をつけるためには、「メモを取る習慣」が必要だ。

【イ】

私はちょっとした会話でも、簡単なメモを取る。図にすることもある。メモを取ってあげば、相手の話の^B がつかみやすい。会話をクリエイティブにするには、自分の思考と相手の思考とを混ぜ合わせる必要がある。自分の言いたいことだけ言って終わりという人をししばし見かける。これは思考のすり合わせができていないケースだ。メモを取る習慣のある人は、自分の^B だけで話をしないようになる。

【ウ】

メモをする力も、読書を通じて鍛えられる。離れた段落に^B を探す練習が、メモ力を

鍛える。「今読んでいることは、たしか前の方でも出てきたな」と思っ探してみる。そして、ガイドウ箇所があれば、そこに線を引いたり○で囲んだりする。こうすることによって、前後関係に、読者である自分が積極的に **B** をつけることになる。あるいは、読み進めながら「あ、ここは後で大事になりそうところだな」という感性を働かせながら、チェックをしていく。全部が当たるわけではなくとも、後でそのチェックが生きてくる。**【エ】**

肝心なのは、常に **B** を考えながら読書をし、会話をすることだ。 **B** のない内容の本も世の中にあることはないが、通常本は **B** を大事にしている。 **D** いわば **G** ストライクが常に来るバッティングセンターのようなものだ。一般の会話は、ストライクゾーンに来るとは限らない。相手の話自体に **B** がないことも多いからだ。まったく **B** のない話には **B** をつけるのは、さすがに難しい。本のようにきちんとした主張があるもので **B** をつける練習をする方が合理的だ。しかも本の場合は、内容は会話に比べて多く含まれているので、そこで練習をしておけば、実際の会話では要点をつかむのは一層容易になる。

【オ】

問一 二重傍線部 a↘e のカタカナを漢字に改めなさい。

問二 傍線部 A「読書をする」とどんな力がつくのか」とあるが、この問いに対する筆者の考えを本文から二十字以内で抜き出して書きなさい。ただし、字数には句読点などの記号を含むものとする。

① 読書は「
」。

② 読書をする「
」。

問三 空欄 B に補う言葉として最も適当なものを次の ①～⑤の中から選び、記号を答えなさい。

- ① 内容
- ② 価値
- ③ 品格
- ④ 動機
- ⑤ 脈絡

問四 傍線部D「いわば」は、どのような役割の副詞か。語群の中から適当な言葉を選びなさい。

語群 【選択 換言 説明 例示 転換】

問五 傍線部E「要約力を鍛えることによって、ライブでの会話の要約力が向上する。」とあるが、このことの説明として適切でないものを次の①～⑤の中から一つ選び、記号を答えなさい。

- ① 相手の話の要点をつかみ、その要点を引き受けて自分の角度で切り返すこと。
- ② 読書を通じて要約力を鍛えることによって、相手の言っていることをつかむ力は格段に向上する。
- ③ 会話は空中を流れていくイメージなので、つかまえどころがない。
- ④ 本は文字が固定されているので、振り返って要点を探しやすい。
- ⑤ 会話で要点を外さずに捉え、うまく切り返す能力は、いわばどのコースに来るかわからない球を打つようなものだ。

問六 空欄Fに補う言葉で最も適当なものを次の①～⑤の中から選び、記号を答えなさい。

- ① 化石
- ② 金塊
- ③ 歴史
- ④ 水脈
- ⑤ 記憶

問七 本文からは、次の段落が脱落している。この段落を補うのに適切な場所の記号【ア～オ】を答えなさい。

本の著者は、それぞれ自分の主張やペースを持っている。そうした複数の著者と付き合うことで、聞く力が練れてくる。本によっては、非常にわがままな著者もいる。それに著者はたいがい個性的だ。様々なタイプの著者に数多く付き合うことで、いわば人間が練れてくる。人の話をきちんと聞き続けることができるだけでも、相当社会性は高いと言える。

問八

傍線部**G**「ストライクが常に来るバッティングセンターのようなものだ。」とあるが、これを具体的に表現している言葉を最後の段落から六文字で抜き出して書きなさい。

問九

次の文章は、齋藤孝の著書『コミュニケーション力』の一部である。先に挙げた本文中の傍線部**C**には『「ていうか」という始まりで、まったく別の自分だけに關心のある話をしたならば、相手はうんざりしてきて人格さえも疑うようになる』とあるが、話す相手によって受け止めが異なるのはなぜか、これについてあなたの考えを書きなさい。記述の際には、『読書力』本文中の「ていうか」の内容を踏まえ、百五十文字以上、二百字以内で書きなさい。ただし、字数には句読点などの記号を含むものとする。

若い人の間で近年流行している言葉に「ていうか」というものがある。本来は「というよりは……じゃないか」という意味の言葉であろうが、現在は話題をころつと変えるときの便利な言葉として使われている。相手の話していることに異議を挟み、対話をより深くするために自分の意見を言う——そのための言葉ではなく、「ていうか」一語で話題を全く変えてしまうのだ。

私は十代の女の子が、こうした「ていうか」を連発する会話を身近で聞いたことがあるが、それはある意味で非常に見事なものであった。それまで相手の話していたことと全く関係のないことを話し始める。お互いに言いたいことだけを言う。全く話を聞いていないというわけではない。しかし、そこにまわりついて同じ話題を継続するよりは、自分の話したいことを話す方を皆が選択している。これは完全に友達同士で共有されているルールのようなので、その範囲では問題がない。限られた時間内にお互いに言いたいことだけ言うやり方として、「ていうか」の多用はそれなりに有効である。

齋藤孝 『コミュニケーション力』